

<書評>ジェレミー・A・イエレン 『大東亞共栄圏 : 総帝国が総戦争に出会った時』

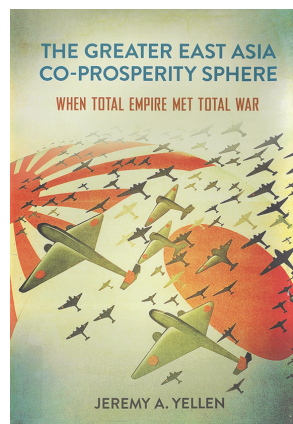
著者	モーガン ジェイソン
雑誌名	日本研究
巻	64
ページ	264-267
発行年	2022-03-31
その他の言語のタイトル	<Book Review>Jeremy A. Yellen, The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere: When Total Empire Met Total War
URL	http://doi.org/10.15055/00007825

ジェレミー・A・イエレン

『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』

Jeremy A. Yellen, *The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere: When Total Empire Met Total War*

ジェイソン・モーガン



Cornell University Press, 2019

ある都市か国家が権力を地理的に膨らませて、支配下の領域を拡大する時、それは帝国と呼ばれる。一般に言えば帝国は、中心政体が膨張して外国の領土、人々まで覆つて、その空間と住民を中心政体に包摂する事だ。

あらゆる帝国は必ずこの特徴を見せる。しかし、それぞれの帝国によつて、中心政体の膨らみ方が異なつて、権力の膨張を具体的にどう管理するか（それかどう管理し損なうか）も大きく変わる。ある意味で、帝国は政治的養子縁組のようなプロセスで形成されるから、人間関係に大きく左右される部分もある。

大日本帝国の場合、帝国の本格的膨張がグローバルな自由貿易体制と資本主義体制の崩壊を背景としており、それと同時に大日本帝国の膨張が白人によるアジアでの植民地支配の動揺をもたら

したので、大日本帝国の建築は日本と周辺諸国との間の経済的、政治的安定を求めながら企画された。当時の経済、政治の諸問題を克服する方法として、日本の政治家、軍事指導者などが、大日本帝国をアジアと太平洋にまで拡張する「大東亜共栄圏」というアウトタルキー圏を構想して実現を試みた。大東亜共栄圏は、大日本帝国の膨張のテーマになつて、大日本帝国の「他者」との付き合い方の基本にもなつた。

おそらく読者にとって「大東亜共栄圏」は、おなじみのフレーズかと思う。大日本帝国、もしくは十五年戦争に関する歴史の本で、「大東亜共栄圏」はよく言及される。昭和十五年（一九四〇年）八月に、外務大臣から拓務大臣になつたばかりの松岡洋右がラジオ放送で大東亜共栄圏を発表して、政治のキャッチフレーズ

になっていた「新秩序」をアジアにもたらす意志を強調した瞬間から、「大東亜共栄圏」のスローガンがアジアで頻繁に繰り返されるようになった。大日本帝国の指導者が松岡の希望を裏切つて太平洋戦争の引き金を引いた理由も、大東亜共栄圏の実現にあると歴史の書籍でしばしば言われている。

しかし、その大東亜共栄圏とはいったい、なんだったのか。日本とアジアの近現代史において、極めて重要な概念なのに、大東亜共栄圏が具体的に何を意味するか、説明は意外に困難だ。香港中文大学准教授ジェレミー・イエレン氏が最近出版した『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』は、大東亜共栄圏を主題とする英語で書かれた最初の単行本だ。大東亜共栄圏は大日本帝国の思想的骨組みを知る上で不可欠の概念だが、一九四二年二月、当時の総理大臣・陸軍大臣の東條英機がある会議で、「国防圏」と「共栄圏」との違いが分からないと告白するほど、その本質を掴むのは難しい(すむ)。歴史的意义が非常に高いのに、理解度が非常に低い大東亜共栄圏の研究を進めるためには、資料館などでの徹底した調査や背景研究に基づいたイエレン氏のこの本が必読の一冊だ。

大日本帝国のみならず、全ての帝国は、「想像」と「現実」との競争だと言えよう。目標とする地政学的結果があつても、それを実現しようとする前途には様々な妨害や挫折が待っているはずだ。

想像された帝国と、厳しい現実との衝突が、歴史を作り出すわけだ。二つのセクションに区切られているこのイエレン氏の本は、見事に帝国の二分性を反映する。

パート1は「想像される共栄圏」で、日本が一九三〇年代にどういう政治状態に置かれていたかを詳細に説明する。想像を束縛する政治的リアリティをつくづく感じさせられる。第1章「虎穴に入つて」は、一九四〇年九月に締結された日独伊三国軍事同盟の政治文脈を分析する章だ。日独伊三国軍事同盟は、十九世紀に有力だった勢力圏外交の延長線上に形作られたとイエレンは解釈する。当同盟はソ連の膨張と威嚇に制限を掛けるために締結されたとみなすのが一般的理解だが、イエレンの結論は異なる。アジアにおける白人支配に終止符を打つという大日本帝国のプロジェクトにドイツを干渉させないために、松岡洋右がその同盟を強く望んでいた、というのだ。確かに、大日本帝国が大胆に挑んだ汎アジア主義のプロジェクトを踏まえれば、イエレンの解釈には説得力がある。

第2章では、勢力圏の歴史をもっと深く掘り下げる。一八八四年〜一八八五年にかけて開催された、いわゆるアフリカ分割を定めるベルリン会議が一九三〇年代の勢力圏交渉に概念的影響を与えていたとイエレンは主張する(pp. 49-50)。しかし、より大きなポイントは、松岡の考え方であると彼は指摘する。大日本帝国は、

十九世紀のヨーロッパ列強と異なり、支配される国々と協力して「共栄圏」を築くべきだと松岡は思っていたという(50)。

この本のもう一つの主なテーマがここで浮かび上がる。八紘一宇だ(51)。このスローガンは、ヨーロッパの帝国主義諸国の単なる圧政帝国主義との差別化を図り、大日本帝国の帝国主義をブランド化するために提唱されたものだ。八紘一宇と言うのは天皇を中心にして、アジア諸国における現地産業の発展と現地住民の独立を大前提に置いた、家族的な帝国主義を意味する合言葉だ(p. 62)。つまりアジアの新秩序は、新しいスタイルの帝国主義によつて実現される、と大日本帝国は主張したのだ。八紘一宇は、大東亜共栄圏と同じく歴史書に頻出するフレーズだが、八紘一宇の意義と適用の方法はあまり取り上げられていないので、イエレンがこの本で八紘一宇の詳細を探索した事には大きな意義がある。八紘一宇も大東亜共栄圏も、対米戦争が意識される中で、変質していった。一九四一年の半ばぐらいから、大東亜共栄圏の建設が大日本帝国の最優先目的になったとイエレンは言う(57)。アメリカとの戦争がほぼ確実だと認めざるを得なくなったこの時から、日本の「自存自衛」を周りの国々の発展と独立の夢と絡める形で、大東亜共栄圏の理想が語られるようになった。実際には、大日本帝国が間もなく戦わなければならない命懸けの大戦争に必要な資源などを獲得するために、日本がアジア諸国を侵略すると

いう考えだったとイエレンは主張する (pp. 71-75)。

第3章は、イエレンによる日本語資料の分析の大きな成果でもある。日本国内の大東亜共栄圏と八紘一宇を巡るデイベートと、同時に激しくなった「国体」とは何か」に関する議論などを、イエレンは多角的に検討する。例えば同志社大学教授田村徳治(59)や、大東亜問題調査会(63)、外務大臣東郷茂徳(62)など、大日本帝国が歩むべき道について様々な意見があつて、「想像」にも大きな亀裂が入つたわけだ。「共栄を想像して」と題するこの章は、イエレンのパート1の中締めとして、日本国内での大東亜共栄圏に関する考え方を紹介する。

パート2、「争われる圏」は、想像された大東亜共栄圏がどうやつて実現されたかを詳しく説明するパートだ。ここでイエレンは「協力者」の歴史的な位置づけにも考慮する。ここでの「協力者」は、英語で言う「collaborator」、かなり負の印象を帯びている。売国奴に近いニュアンスもあり、自国を裏切つて侵略者である外国軍隊などと協力する人を指す「協力者」だが、大日本帝国の代表者などが外国でどうやつて現地の「協力者」と手を結んだか、イエレンがこのパートで予断を排して検証する。焦点を当てるのは、大日本帝国にとつて二つの重要な国、フィリピンとビルマだ。第4章でフィリピン、ビルマの歴史的背景、植民地としての状況などを説明して、二つの国の「協力者」の動機と、大日本

帝国との関わり方を分析する。

第5章で一九四三年十一月に帝国議会議事堂で開かれた大東亜会議が登場する。この会議で東條首相は、大日本帝国によつて築かれたつある汎アジア主義に基づくアジアでの新秩序を説明して、大日本帝国が英米などによる植民地主義からの解放をもたらしていると強調した(91-92)。会議に出席していたビルマの独立運動家バー・モウとインドの独立運動家スバス・チャンドラ・ボースは東條の発表を肯定的に受け入れたが、中国の代表者汪兆銘、フィリピンの大統領ホセ・P・ラウレル、それからタイの外交者ワンワイタヤーコーン親王は懐疑的だった(96, 111-115)。この章で扱った時期には、「大東亜共栄圏」の意味の移り変わりがとりわけ顕著だ。大東亜会議で採択された大東亜共同宣言は、一九四一年八月にアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトと大英帝国首相ウインストン・チャーチルが署名した「大西洋憲章」の太平洋バージョンという性格を持ち、一九四三年の終わり頃から大日本帝国はより自由主義的な帝国を標榜するようになったとイエレンは主張する(9, 116)。大日本帝国とそれに関連する想像も実現も、決して日本側が一方的に進めただけではない。

第6章は、戦争状態が悪化するに伴つて、大日本帝国の指導者が想像して、建設した大東亜共栄圏の一部であるビルマとフィリピンが独立すると同時に、連合国に宣戦するようビルマ、フィリ

ピンの指導者と交渉した流れを紹介する。結びの章では、日本の敗戦後も、八紘一宇の理想が生き続けたという認識について論じる。元大東亜共栄圏の国々の独立と、日本が指導する経済発展は、戦後世界に適応する形で再生した大東亜共栄圏だというのが、拓殖大学学長である予備役軍人の宇垣一成が一九四五年八月十一日にこのような希望と、大日本帝国が挑戦した事への誇りを主張した事実をイエレンは指摘して、戦前、戦中、そして戦後における政治方針の変遷と思想の一致性を共に浮かび上がらせる(92)。

大日本帝国の思想的フレームワーク、つまり汎アジア主義、大東亜共栄圏、八紘一宇などのアイディアと、それらがどうやってオン・ザ・グラウンドで実現された(またはされなかった)かについて論じた本書は、大日本帝国の本質を明らかにする上で大きな貢献を果たした。

大日本帝国が白人至上主義に対して立ち向かつて勝負した詳細を書いたアメリカ人歴史家ジェラルド・ホーン教授の著書を予め読んでから『大東亜共栄圏——総帝国が総戦争に出会った時』を読んでいたきたい。アジアでの白人至上主義がどれだけ酷かったかを知った上で大日本帝国を再考する事がこれからの課題と思う。イエレン氏が描写する通り、大東亜共栄圏は、虚しいスロウガンではなく、「想像」と「現実」との境目に叫ばれた、必死の戦いの気合だった。